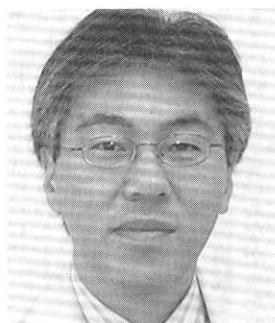


ホスピスを知って欲しい

函館おしま病院院長
福德 雅章



ホ

スピスを開設して4年日
胸に水が溜まったときに

「輸血はしてもらえるのでしょうか?」、
「ホスピスとは何か、ホスピスでは
どういう治療が行われるのか、と
いうことがまだ理解されていない
ことを痛感します。こういった質
問が、患者さん本人やご家族から
されるならまだしも、医療者(医
師や看護師)からですと、なおさ
らがつかりしてしまいます。「も
っと、もっと、ホスピスを知って
欲しい」という切実な思いがあり
ます。

私たちは、あえて「ホスピス」
という言葉を使っています。それ
は、「ホスピス」に歴史の重みを
感じ、またその理念はまさしく医

の原点であると感じるからです。
日本では、診療報酬上は、「緩和
ケア病棟」という名称が使われて
います。ホスピスがなかなか理解
されない原因の一つとして、言葉
の使い方の問題もあると感じてい
ます。

即

ち、「ホスピス」という
と、死にゆく人と家族を
全人的に支えていくケア

のプログラムですが、この「死に
ゆく人」という部分がなかなか受
け入れられないところかと思いま
す。何となく「あきらめた人だけ
が入る場所」という印象を受け、
結果として、「もうやることがな
いのだから、何もしない場所」と
いうイメージを持ってしまふのか
もしれません。よって、中には、
医師や看護師の居ない施設と同じ
ように考え、「ホスピス」というと、

「医療行為そのものが行うことが
できない場所である」という認識
の方もいるようです。

「ホスピス」という言葉は先に
記したように、そもそもは、ケア
のプログラムを意味しています。

それを病院という場で実践する場
所が、日本では、「緩和ケア病棟
」ホスピス(病棟)」と称されて
います。確かに入院された多くの
方は、死が避けられませんが、私
たちはその方の苦痛をできる限り
緩和し、またQOLを向上するこ
とに全力を尽くします。とりわけ、
精神的・社会的・スピリチュアル
な苦痛の緩和にも力を注ぎ、家族
ケア(遺族ケア)も大切にしてい
ます。

胸

水や腹水穿刺、輸血、抗
生剤投与、高カロリー輸
液などは、苦痛をむやみ

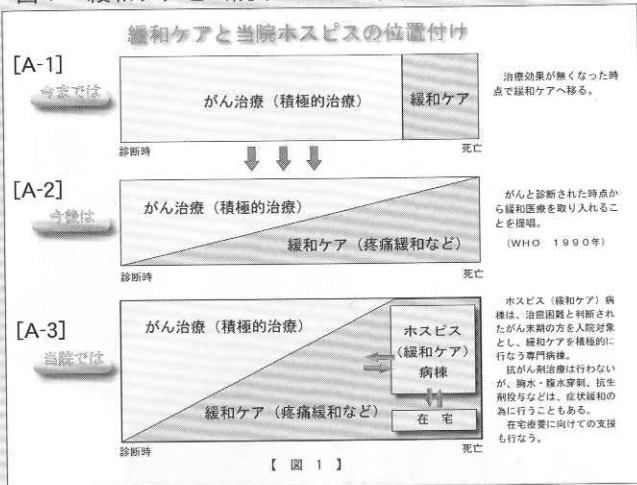
に引き延ばすだけであつたり、そ
の場を取り繕ったり、気休めのた
めだけには行いませんが、その行
為が、本人や家族も希望し、明ら
かに苦痛緩和やQOL向上に繋が
るのであれば、積極的にを行います。
患者さんの置かれている状況(症
状、病期、余命など)、希望、治療
行為のメリットとデメリットのバ
ランスなどについて、チームで十
分に検討していくことを大切にし
ています。

ホ

スピスがヨーロッパを
中心に広まっている中で、
「緩和ケア」或いは「緩
和医療」という言葉が生まれまし
た。日本では、両者が同じ意味合
いに使われ、私たちのようなホス
ピスも、病院によって、「ホスピ
ス」という名称を使ったり、「緩
和ケア病棟」という名称を使つた

ふくとく まさあき
函館出身。金沢医科大学卒業後、同大学血液免疫内科助手、同大学血液センター副部長、
竹植移植責任医師を兼任。平成10年には栄光病院(福岡県)に勤務。平成14年2月より
函館おしま病院の理事長・院長に就任。平成17年からは金沢医科大学非常勤講師。
日本内科学会、日本血液学会、日本リウマチ学会、日本緩和医療学会、日本サイコオン
コロジー学会、日本死の臨床研究会

図1 緩和ケアと当院ホスピスの位置付け



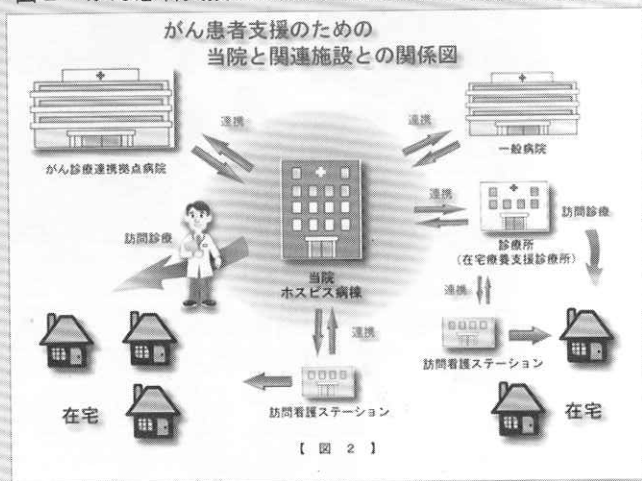
りしてはいますが、本質的に同じです。しかし、近年、WHOの「緩和ケア」の定義を見ると、「死にゆく人とその家族」だけを対象とするのではなく、「生命を脅かす疾患に直面する患者と家族」を対象としています。即ち、がん患者で言えば、末期になったから施すというケアではなく、「がん」という

診断を受けたその時から「緩和ケア」は始められるべきである、と提唱しています(図1 A11、A12)。が国では、今年4月からがん対策基本法が実施され、その中に、緩和医療及び終末期医療の充実も謳われています。即ち、患者さんは「がん」と診断された時から治療を受けている段階においても、さらにはい

我

が国では、今年4月からがん対策基本法が実施され、その中に、緩和医療及び終末期医療の充実も謳われています。即ち、患者さんは「がん」と診断された時から治療を受けている段階においても、さらにはい

図2 がん患者支援のための当院と関連施設との関係図



よいよ治療が困難となった、いわゆる「がん末期」といった状況になっても、「緩和ケア」を受けることができるようになることが目指すところです。そして、私たちのような「ホスピス/緩和ケア病棟」は、従来どおり、より穏やかな環境で、ボランティアを含む厚みのあるチームによって、患者さんのQOL向上に重きを置いたケアを提供する役

割を担うこととなります。「ホスピス/緩和ケア病棟」では、確かに抗がん剤治療などの、癌の治療を目指すような治療は行いませんが、「治りたい」希望は支えていきます。苦痛緩和やQOL向上のためには、より積極的な治療を行うわけです。(図1 A13)

最後に一つ付け加えておきたいことには、「ホスピス/緩和ケア病棟」に入院されても、退院してご自宅で元気に過ごされている方も居ますし、再度、積極的治療を受ける気持ちを持ち、がん治療病院へ戻っていかれた方もいます。もちろん、最後まで「ホスピス/緩和ケア病棟」で自分らしさを全うした方も多くです。どのような道を歩まれるのかは個性がありますが、どの場合であっても支援ができるように、地域の医療機関や訪問看護ステーション等との連携強化に努めています(図2)。

最

後には、苦痛緩和やQOL向上のためには、より積極的な治療を行うわけです。(図1 A13)